

第16回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「ひとりで電車に乗った日」

東京都 立教女学院高等学校三年 内田 夏鈴



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『ひとりで電車に乗った日』

東京都 立教女学院高等学校三年 内田 夏鈴^{かしん}

このふわふわと高鳴る思いは何だろう。じつまでじつまでも行けそう、今にも泣きだしたいようなこんな気持ちはなんだろう。窓から差し込む太陽の光は暑くて、目に突き刺さってくるのに、移り変わる景色をいつまでも眺め^{なが}ていたくなる。

今日、私は初めて一人で電車に乗った。隣町に住むおばあちゃんの家に行くために。いつもはお母さんとお父さんと一緒に行くのに、今回は私一人。理由はお母さんがもうすぐ赤ちゃんを産むから。お腹の中の赤ちゃんはあんまり元氣じゃないんだって。だからお母さんは入院して、ていおーせっかいするらしい。お母さんのお腹をぱかっと開けて赤ちゃんを取り出すんだって。なんか七匹の子ヤギのオオカミさんみたい。お腹に石を入れて川に流されちゃったオオカミさん。あ、お母さんは取り出すだけか。でもお腹を開けるってなんか怖い、なんて。みんなには赤ちゃんできるの楽しみって言うけど、ホントはちよっぴりいやだ。だってもし本当にお母さんがオオカミさんみたいにお腹に石を入れられたらいやだもんね。でもお父さんもお母さんもそんな私の気持ちは知らないから、我が家は新しい家族を迎えるために大忙し。夏休みで良い機会だし、お父さんは今日から仕事とお母さんのお見舞いで忙しいからって、私はおばあちゃんちに行くことになった。クラスで一番頭のいいタクくんは「お払い箱ってことだな」って言ってたっけ。みんなは怒ってくれたけど、私も本当はタクくんの言う通りだと思う。私はじやまだから遠くに行けってことなのかな？とか考えてみたり。そういう気持ちの時ってほら、あるじゃん？愛されてない不幸な子どもを演じたい時って。私も今はそんな気分だから、昨日の夜は一人でこっそり泣いてみた。意外とかなしー気分になれるんだよね、これが。結構クセになるかも。

駅のチャイムが聞こえる。これで五つ目。おばあちゃんの家は線路の一番最後だからまだまだたっぷり時間がある。いつもはお母さんとの話そっこの



けでゲームしてるけど、今日に限ってそんな気分になれない。だから、仕方なく窓からの景色をみて時間を潰す。朝の九時、電車は混んでる時間らしいけど、私の乗ってる電車は田舎に向かう方だから空いてるんだってお父さんが言っていた。確かに周りには、何人かのサラリーマンと一組の学生さん、あと化粧の濃いおばさんしかいない。だから車内は静かで居心地がいい。学校では元気な方が楽しくて好きだけど、知らない人がワイワイしてるのはうるさいだけだしね。

また次の駅に着く。この駅メロは確か有名な童謡。私も昔歌ったはずの曲で、今度からは生まれてくる赤ちゃんが歌う曲。その鳥がさえずるようなメロディと一緒に、羽のバサバサって音が聞こえた。なんとなくドアの方に目を向けると、あれ？入ってきたのは私と同じくらいの、つまり小学三年生くらいの女の子。しかも一人。大きな赤いリュックを背負っていて、ショートカット。ダボダボの白いTシャツにジーンズっていう格好だった。まあ、私から言えば、うん、オシャレとは程遠いかもしれないな。ごめん、ウソついた。正直だし。うちのクラスならヒソヒソって噂されちゃうくらいには。その子は下を向いたまま電車に乗ると席には座らないで、窓に寄りかかりながら立った。周りなんて見向きもしないで、ぼんやり外を眺めだす。なんかこーゆーのって不思議。学校なら暗くて大人しそうなああいう子には話しかけないし、興味もわかない。どっちかっていうと避けちゃうくらいなのに。この電車にはその子と私しか子どもはいないし、どっちもひとりぼっちだからかな？変な興味が湧いて、話してみたいかと思えちゃう。話しかける？私か？なんだか自分でもびっくりかも。「ねえねえ、こんにちは！ 私、明日香！よろしくねー！」みたいなの？いやだよ、そういうの。友達作りたいみたいでさ、引くでしょ、普通。私だったらドン引きだよ、ドン引き。でもさ、なんていうか、今日の私おもしろいのかも。ひとりぼっちだから？いつもと違うからって、私まで変わっちゃったのかも。席を立ったりして、その子の前に立ったりして。

「……あの」

聞いたことないような高い声で見知らぬ子に話しかけたりしてる。

「……何？」



話しかけたその子は、私の方を振り向くとちょっと驚いた顔をした後、すぐにまた窓の方を向いてそっけなく呟いた。感じ悪いなあって思っけど、とりあえずスルー。

「んー、ほらー！ 同い年っぽかったから！ リュック持ってるし、一人だし！ 私と同じかなって！ あ、私はおばあちゃん家に行くんだけどね。お話とできたら嬉しいなーって思っって！ ほらこの電車、結構長いでしょ？」

大人しい子でも心を開きやすいようにできるだけ明るく、元気に話しかける。これは、私のじょーとーしゅだん。クラスだって児童館だって、とりあえず元気に、この子と話してれば楽しいだろうなって感じで話してれば、みんな声かけてくれるし、輪の中心にいられる。明日香といると楽しいねって、これ言われるとホントのホンキに嬉しいんだよ？でも帰ってきた反応は予想外のものだった。

「別に、私は話したくないから」

こっちも向かずにそう言われて、ちょっとムツときた。えらそうだな、この子。話しかけられたんだから、笑顔でうんって答えるべきじゃない？学校でやったら嫌われる答え方、ナンバーワンだよ、今の。せっかく話しかけたのになって思う。私も下手に席を立ちちゃったから、断られたからって席に戻るの気が引ける。勢いよく立ちちゃったぶん、周りの人にあの子断られたんだーって目で見られたくない。かといって、あんなこと言われたのに会話を続けるわけにもいかない。私と彼女の間には不自然な沈黙が訪れてしまった。はあ……こういうの苦手なんだよなー変な沈黙。一秒一秒が長く感じられて、そのたびに相手に嫌われていくような居心地の悪さを感じる。こんなことなら話しかけない方がよかったかも。うん、次はゼーったい同じことはいないって勝手に誓いをたてる。なーんて言っっても今の沈黙がなくなるわけじゃないけど。

仕方ないから私もぼんやりと外を見た。さっきまではビルに囲まれていたのに、今は住宅街ばかりが続いていく。青い屋根、黒い屋根、アパート、赤い屋根にまた青い屋根。その一つ一つの家に人が住んでいて、家族が生活してるって思うとちょっと不思議。外から見るとただの建物でしかないのに、中に入るとその一軒一軒が誰かの帰る場所で、誰かの大切な場所なんだから。あそこの家にはどんな家族が住んでいるんだろう。あっちの家には？おばあ



ちゃんと一緒に住む家もあれば、新婚のラブラブ夫婦の家もあるだろうし……もうすぐ赤ちゃんが生まれる家だってあるかもしれない。ちょっとロマンチックなこと考えている、自分。今日の自分は本当に変だなーって、おかしな気持ちになって思わず笑み^えがこぼれた。すると、目の前で窓を見ていたその子がこっちを見てきた。慌^{あわ}てて、顔をもとに戻す。一人でニヤニヤ笑っているなんて変な子って思われちゃうじゃん。危ない、危ない。それなのに返ってきたのはまたまた意外な言葉で。

「そっちの方がいいじゃん」

「へ?」

何言ってるの、この子。そっちの方がってどういうこと?そんな気持ちで思わず、そう答えてしまった。

「さっきの。ウソくさい笑顔より今の方がいいよ」

今のは、見られてたの?ちょっと恥ずかしいけど、別に変な風には思われてなかったみたいだから安心かな?でも……。

「ウソくさいって?」

さっきよりムツてきて、そう聞くと彼女は平然と答えた。

「だからさっきの。話そうよって言った時の笑顔。あれウソだった。とりあえず笑ってますって感じで。ああいうの私きらいだから」

さっきまで感じてたこの子への怒りが私の中でフツフツとぶくらんでいく。何それ、えらそうに。そんな私の勝手じゃん。私はそーやって生きてきたんだし、困ったことなんて一度もなかったんだから。

「別に、いいじゃん。私の勝手でしょ? あんたにきらわれるとか、関係ないから」

さっきやられたみたいに思いつき感じ悪く答えてやったのに、目の前のその子は更におかしそうに笑った。この子本当変な子かも。

「うん。本当、そっちの方がいいよ」

「何それ?」

「今、怒ってるでしょ?」

「怒るに決まってるよ、突然笑われたら」



わけのわからない行動しておいて、怒ってるでしょ？ってばかにされてるように思えて、私の怒りは限界に達していた。何が言いたいんだろう、この子。

「そうだよね、ごめん、ごめん」

さして悪いとは思ってなさそうに軽く謝るもんだから、更にムツとなる。私が怒ってるって本当にわかってるのかな？

「私はそっちの方が好きだって思って」

「へ？」

さっきまで怒ってたのに？感じ悪くしてたのに？こっちの方が好き？わけがわからない答えに驚いて思わず間抜けな声が出してしまった。

「だって、今のあんたウソついてないじゃん。楽しいから笑うし、怒ってるからいやな言い方するんですよ。私そういう方が好きだよ」

「だって怒ってたもん」

「うん。それは本当ごめん」

「別に、いいけど」

まっすぐにそう言われて、拍子抜けした。変な子だなんていうのは変わらないけど。悪い子じゃないかもしれない。ばかにされてたわけじゃないってわかったしね。怒りも少しずつ収まっていく。

「さっきはごめん。でも今のあんただったら喋しゃべってみたいや。私もこの電車で最後まで行くからわ」

「私も」

こつこつという初めてだから。調子狂うけど、いつもの私じゃないみたいだけども。もともと今日の私は普通じゃなかったんだから。今の間くらい明るく元気な私とバイバイしてもいいのかもしれないって。この子はそっちの方がいいみたいだし、私も、まあ、うん。こっちの方が本当は話しやすいのかも。そう思って、会話を続ける。

「あ、自己紹介まだだったね。私は明日香」

「明日香か、よろしく。私は、みき。未来って書いてみき」

「かわいい名前だね」

「そうかな？」

「うん、意外かも」



「何それ。でも、ありがと。私もこの名前気に入ってるの。お姉ちゃんが付けてくれたんだよ。」

その言葉に少しスキツときた。お姉ちゃんって今一番聞きたくない言葉かも。

「お姉ちゃんねー……」

「そ。私が生まれた時、喜んで一番に名前考えてくれたんだって」

「それ、本当？」

私の中のモヤモヤがまた心を支配する。あーあ、せつかくちよっと忘れてたのに。

「どういっしょと？」

「なんか、信じられなくてその話」

「どうして？」

「どうしてって」

だって、だって、本当は、ホントのホントーっの私は。

「嫌だもん、赤ちゃん生まれるの」

今まで誰にも言っていなかったはずの言葉がスルツとこぼれ落ちていた。バシないように見えないように心の小さな部屋に押し込んでいた思い。見えないようにしていた気持ち。

「赤ちゃん、生まれるの？」

驚いて聞いてくる未来ちゃんに、申し訳ない気持ちもしたけど、でも一度出てきた言葉は、心の奥から落ちていく。

「生まれるの、もうすぐ。そのことはね嬉しいよ、新しい家族ができるのってワクワクするし、お坊ちゃんになれること嬉しいし。ずっと憧れてたんだもん、きょうだいができることも、お姉ちゃんになることも。でもねいやなの」

何も言わずにうなずいてくれるから、言葉は止まらない、もう止められない。このどうしようもない黒い塊は溢れ出て、溢れ出ていくんだ。

「どうしようもなくいやなの。赤ちゃんが生まれたら、お父さんとお母さんが取られちゃうんじゃないかとか、そんな幼稚なことじゃなくて。いや、そういう不安もあるかもしれないけど」

声はどんどんくぐもって行って、涙がボロボロと落ちていく。



「ただいやなの。変わっちゃうことが。だってずっと三人だったんだよ？ ずっと三人家族だったのに、突然新しい人が入って、今の私が、私の家族が、変わっちゃうのが怖いのに」

ずっと心にいた黒い塊が外に出終えても、涙は溢れ続けている。本当、今日の私は何をやってるんだろう。はじめて会った子の前でこんなに泣いちゃうなんて。友達の前だってこんなに泣いたことないのに。でも、どうしてだろ？ この子の前では泣いてもいい気がしたんだ。どこか安心する気がしたから。

「お姉ちゃんもそうだったのかなあ」

聞き終えた未来ちゃんはほんやりとそう呟ひたやいた。

「ごめん。その、これは私の思いで、未来ちゃんのお姉ちゃんは違つと、思うよ」

未来ちゃんのこと、心配させちゃったかもしれない。焦あせってそういうと未来ちゃんはさっきまでと変わらない笑顔で笑ってくれた。

「ううん、いいの。あーお姉ちゃんってこんな気持ちなんだって想像できたから」

「ごめん、本当に」

「いいんだって。だって私にはお姉ちゃんの気持ちわからないじゃん？ だから結構知れて嬉しいんだよ」

なんでだろう、やっぱり未来ちゃんの笑顔を見ると安心する。

「明日香ちゃん、これ見て」

そう言って未来ちゃんを取り出したのはうすけた茶色のうさぎのぬいぐるみだった。目はボタンで、つぎはぎされた布でできている。長い間使われてきたことがありありとわかるぬいぐるみだった。

「何これ？」

「お姉ちゃんがね、私が生まれる前に作ってくれたんだって。初めての縫ぬい物で、いーっぱい失敗しながら」

「へえ」

「でも、これを作ってた時、お姉ちゃん本当はどう思ってたんだらう？」
「……」



私には何も言えなかった。だってあんなに泣いちゃったわけだし。未来ちゃんが生まれるの楽しみだったと思うよ、とか私にはウソでしかない。ウソはもうつきたくないんだ。

「うん、意外と私なんて生まれなければいーって思ってたかも」
そう言われた瞬間、ハツとした。さっきまでの悲しさとは違う。そうじゃない、そうじゃなくて。

「生まれて欲しかったよ！ ぜったい！ それだけは本当だからっ！」
電車の中だってこと忘れるくらい大きな声で叫んでいた。周りの人もチラッと私の方を見てくる。恥ずかしくて顔が真っ赤になるのがわかるけど。でも、これだけは伝えたかった。だって。

「もちろん不安だし、怖いけど、でも違うの。生まれてきて欲しいの、私は、ちゃんと無事に生まれて欲しい、生まれてきて欲しいの」

赤ちゃんを産むのが大変だって聞いたとき不安だった。本当にちゃんと生まれてきてくれるのか、お腹を切らなくちゃいけないほど大変なのか。今が変わるのは怖い。もう二度と三人家族だった私には、戻れないんだから。でも、私は。

「私は赤ちゃんに早く会いたいよ。だから未来ちゃんのお姉ちゃんもきつとそうだったよ。ううん。ぜったい、未来ちゃんが生まれてくるの楽しみにしてた！」

未来ちゃんの目を見て伝える。これだけはぜったいにちゃんと伝わって欲しいから。

「うん、ありがとう」

目が合うと未来ちゃんはまた微笑^{ほほえ}んでくれた。

「それ聞いて、安心した。ありがとう」

まっすぐにそう言われて少し照れてしまう。

「別に、もともと私が悪いから」

「確かに、そうかも」

また目が合って思わず二人で笑いあう。なんだろう、こんな風に自然と笑えたのは久しぶりかもしれない。気持ちを全部吐き出せたからかな。それとも自分の本当の気持ちに気がつけたから？うん、そうかもかもしれない。未来ちゃんに会えて、話せたからかも。ううん、ぜったいそうだ。私が未来ちゃんに



ありがとうを伝えようと口を開くと、笑っていた未来ちゃんは不意に真面目な顔に戻って、私よりも先に話し始めた。

「私、お姉ちゃんの気持ち知れてよかった、だから私はもう大丈夫」
その声の真剣さに違和感を覚える。

「私、もう行かなきゃ」

「へ？ だって最後まで行くんじゃないの？」

「その予定だったんだけど、もう大丈夫だから」

何を言っているのかわからず、疑問ばかりがわく。それにさっき私のこと……。

「未来ちゃん、未来ちゃん今っ！」

聞こえようとすると目の前がパツと明るくなった。その光に耐え切れず、思わず目をつむると声だけが耳に響いた。

「お姉ちゃん、また会おうね」

目を開くと、そこは変わらない電車の中で、私は椅子に座って、柱に寄りかかって寝ていた。辺りを見回すと未来ちゃんはいなくて、もう人はほとんど乗っていない。アナウンスがなり始めて、最後の、つまりおばあちゃんの住む町にもうすぐ着くことを告げられた。さっきの夢だったのかな、うん、きっとそうだ。だって一緒にいたはずの子がいなくなってるわけだし、それに、未来ちゃんは最後私のことをお姉ちゃんって呼んだんだもん、夢に決まってるよね？けど、夢だったはずなのに私の心はなんだかポカポカと温かくて、スツキリと晴れやかになっていた。もうすぐ我が家に赤ちゃんが来る、それは今でもやっぱり怖い。でもきっと大丈夫だ、だって私はこんなんでもお姉ちゃんになりたくて、赤ちゃんに会いたくてたまらないんだから。

駅に着いて迎えに来てくれたおじいちゃんと一緒に、車に乗って家に行く。待ちくたびれたおばあちゃんは趣味の裁縫さいほうをしている。私はおばあちゃんのちよっと古い布を見て、人形を作りたいって言って、初めての裁縫をして……。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

生まれてくる赤ちゃんに未来って名前を付けるのもそんなこと遠いことじゃ
ないかもしれないって思った。